

## 女神の末裔 第二章



国栖くすに向かうには、王宮の南、高市たけちの地に至り、そこから水路で山あいの川をさらに南へ下らねばならない。

ヤマトの大王の版図の南は川で区切られていた。川の向こうはまつろわぬ民の潜む未知の地であった。高市の川原の北岸には津つが設けられている。外敵の侵入を防ぐため城柵を施し、久米、大伴、佐伯などの豪族の供出した兵五十が常駐していた。津を宰領しているのはアダヒメの異母兄イリビコ（入彦）の皇子である。

王都より歩いて二日、アダヒメと稗田阿礼ひえだのあれは高市の津に到着した。城柵の門に櫓やぐらが建てられていた。櫓の兵が一声叫ぶと、さつと門が開かれた。

「妹なる皇女よ。久しぶりだ」

磊落らいらくな偉丈夫のイリビコの皇子が、久米くめ、大伴おおとも、佐伯さえきの兵いくさのおおさ、長たちや矛を携えた兵を引き連れて出迎えた。

「汝一人か」

アダヒメは背後を振り返った。いるはずの阿礼の姿がなかった。イリビコは首を傾げた。「稗田の史人ふひとを伴っていないのか」

アダヒメは首を振った。イリビコの皇子は無口な異母妹に重ねて問わなかった。

「昨日、大王おおきみからの早馬はやまが着いた。汝に船と干し飯ほいを貸せとの命令だ」

イリビコの皇子は川を指さした。丸太をくり抜いた粗末な船が川原に打ち上げられていた。が二丁、水を入れた壺、干し飯の入った布袋が積んである。イリビコは、自分よりも背の高い異母妹を上目遣いで何うように言った。

「兵を貸し与えよ、との命は受けていない」

アダヒメは無言で頷いた。イリビコは安堵したように相好を崩した。

「疾う行くか」

「イリビコの皇子よ」

声はアダヒメではなかった。見ると、アダヒメの背後に阿礼が立っていた。

「皇女は二日の旅で疲れている。じきに日も暮れる。疾う行け、とは大王の命を受けてまつるわぬ民を討ちに行く皇女への仕打ちではあるまい」

イリビコの皇子は一瞬、狼狽した。だが、すぐに微笑みを作った。

「汝が稗田の史人か」

阿礼は膝をついて拝礼した。

「乙女とはな」

阿礼は答えず、アダヒメに何やら耳打ちした。アダヒメは耳を傾けながらイリビコの皇子を見た。不安が、大きな髭面に徐々に拡がっていた。

アダヒメは川原の石を踏んでイリビコに歩み寄った。皇子は半歩、後ずさった。

「兄なる皇子よ」

アダヒメの息がイリビコの額を撫でた。

「今宵はこの津に泊まる」

イリビコは眼を逸らした。

「寝屋がない」

「諾」

アダヒメは言った。

「疾く、行こう」

イリビコはほっとしたように息を吐いた。アダヒメは踵を返した。

「ぐっ！」

イリビコの呻き声が響いた。兵たちはさっと矛を構えた。

アダヒメは踵を返すとみせてくるりと回転した。左手でイリビコの喉輪を締め、右手で股間を握りしめていた。

イリビコは苦しげに顔を歪め、口を動かして何か言おうとした。アダヒメは右手をひねった。鞆丸を強くひねりあげられ、イリビコは絶叫した。

アダヒメは兵を見回した。矛を構えた兵たちは気押されたように動かなかった。稗田阿礼は眼を輝かせ、イリビコが水に溺れたように顔を天に向け、もがき苦しむ様を眺めていた。

「阿礼」

アダヒメは命じた。

「汝が見たことを話せ」

阿礼は堰を切ったように喋り始めた。

「矢傷を負った兵が十人いた。城柵の外に新しく穿って埋めた大穴の跡があった。その傍らに、切り裂かれ乾いていない血に塗れた甲冑が積んであった。篝火の跡が常の倍あった」

イリビコは必死に唇を動かしたが、鞆丸を圧迫され、全身の筋肉が固く緊張し、息が詰まって声にならなかった。

「兄なる皇子よ。戦の最中なのか」

久米、大伴、佐伯の兵長の貌に動揺が浮かんでいた。イリビコが窮地に陥っているからではないようであった。アダヒメは兵長たちを睨んだ。

「言え。高市の津は戦の最中なのか」

イリビコが兵長たちに眼を向け、何かを言おうとした。アダヒメは怒鳴った。

「言わぬと、皇子の命はない」

十六歳の皇女が一人で且波の王を討ち、オオウスの皇子の鞆丸を握り碎き、全身の骨を砕いて死に至らしめた事はすでに高市の津にも伝わっていた。

「皇女よ」

佐伯の兵長が跪いた。

「南の岸の森に、敵兵が潜んでいる」

南の川岸は切り立った崖であった。崖の頂上は鬱然と樹木に覆われていた。

「皇女よ」

大供の兵長が跪いた。

「船を漕ぎ出せば敵兵は矢の雨を降らせる。夜になれば川を渡り兵たちを殺戮して去る。動きが素早く、捕らえることが出来ぬ」

「皇女よ」

久米の兵長が跪いた。

「敵の姿を見た者はいない。見た者はすべて殺された。ただ一人の兵が、息絶える間際にこう言い残した」

アダヒメの視線が鋭く久米の兵長を射た。

「おとめ……と」

稗田阿礼が低く叫んだ。眼を見開き、両手を口に当てている。驚愕と、求めていたものを見つけたときのような歓喜がその眼に入り交じっていた。アダヒメが問うた。

「阿礼」

阿礼は何か言いかけて口を噤み、顔を背けた。

「兄なる皇子よ」

アダヒメは阿礼を問い詰めず、イリビコの皇子に視線を移した。皇子の眼に涙が溢れ、

全身が激しく痙攣していた。掌中で皇子の寧丸は平たく変形し今にも破裂しそうに脈打っていた。

「今宵、吾と稗田の乙女はこの津に泊まる」

イリビコは夢中で頷いた。アダヒメは手を離した。イリビコは股間を両手で覆って膝を着き、ゆっくりと前倒しに倒れた。

川原に並ぶ天幕の一つがアダヒメの稗田阿礼のために開けられた。

日は沈んだが、川原のそこかしこに篝火が焚かれ、昼のように川面を照らした。兵たちが三人ずつ組になって夜警に立っている。

「阿礼」

夕食は粥と干した川魚、栗であった。アダヒメは碗を置いて問うた。

「汝は、南の岸に潜む敵兵が何者かを知っているな」

阿礼は頷いた。

「何故、その名を口にしなかった」

「イリビコの皇子や、兵長どもに聞かれたくなかった」

「吾には教えるか」

阿礼はしばし俯いた。魚油を焚いた燈火が暗く、その表情までは伺えない。

やがて阿礼は顔をあげた。燈火が赤く、韓渡りの須恵器のように白く端麗な貌を照らし

た。

「皇女よ。何故にイリビコの皇子は出立を急がせたのか」

「船を出せば、南の岸の敵兵が矢を射かけてくる」

「まず生きては渡れない」

阿礼は眼を伏せた。

「矢で貫かれた甲冑が捨ててあった。いずれも、心の臓をまつすぐに貫いていた。ヤマトには、あれほどの射手はいない。剣の傷もそうだ。おそらく一撃で兵の命は奪われている。かほど見事な兵。そして死んだ兵が言い残した、おとめ、という言葉……」

阿礼は言葉を切って口を嚥んだ。瞳に火影が揺らめいている。阿礼はやがて一音一音絞り出すように吐き出した。

「土蜘蛛」

アダヒメは僅かに眉をあげた。

女だけの部族がかつてヤマトを囲む平群、三輪、葛城の山中に穴居していた。土蜘蛛とは、土籠（ツチゴモ）の誤りとも言われている。女ながら武に優れ、ヤマトの地に降臨しクニを開いた日輪の女神の末裔ミマキ（御真木）の大王の軍をさんざんに悩ませた。だが、ミマキの大王は土蜘蛛たちを悉く討ち滅ぼした。そう稗田の史書には記され、ヤマトの国造り神話として伝承されている。

「偽りである」

阿礼は闇の一点を見つめ、ものに憑かれたように呟いた。偽りの史。アダヒメは咄嗟に、オオウスの皇子の言葉を思い出していった。

……吾らは日輪の女神の末裔ではない。吾らの父祖が、日輪の女神の末裔を抹殺し、ヤマトの地を算奪し、偽りに満ちた神代の史を捏造した。

旋風がごとと鳴って天幕を揺らした。雨音が分厚く編まれた天幕の布を叩いた。

「阿礼」

アダヒメは阿礼を見つめた。

「汝は泳げるか」

流れのはやい黒雲が月や星を覆い隠した。横なぐりの風が雨を水平に降らせた。兵が右往左往するなか、篝火が倒れ、あちこちで明かりが消えた。

「火を、疾う火をとませ」

倒れた松明を四人の兵が囲んでいた。一人の兵が火種をとりて走った。彼らは不安げに兵の走り去った方を見つめた。夜が明けると、必ず夜警の兵たちの屍が川原にさらされる。ことごとく口に切り取られた陽物を詰め込まれていた。

彼らの背後で川の水が動いた。兵たちはびくりとして振り返った。

川面が盛り上がり三人の人影が飛び出した。声をたてる間もなく人影が迫り、兵たちは股間に焼けるような激しい痛みを覚えて膝をついた。さらに後頭部に重い衝撃を受け、気を失った。

三つの人影は素早く動いた。兵たちの股間に短剣を突き立てて抉り、血まみれの男根を口に詰め、喉仏を踏みつぶした。

火種を持った兵が戻ってきた。人影が火に照らされた。

年若い乙女たちだった。麻の貫頭衣が水に濡れ、弾けるような素肌に張りついていた。

胸を獣皮の甲冑で覆っている。

乙女たちは兵に襲いかかった。一人は兵の股間を蹴りあげた。兵は火種を取り落とし、うずくまった。一人が背後に回り、兵の喉笛を掻き切った。もう一人は兵の男根を切り落として口に含ませた。

靴音が響いた。異変に気づいた兵が駆けてきた。乙女たちは身を翻して川に飛び込んだ。

対岸の切り立った崖に一筋の太縄が垂らされていた。太縄の真下の川面に三つの頭が浮いた。真先に縄に飛びついた乙女は、背後を振り返り、仲間の無事を確認してから這いのぼった。崖の真上にたどり着き、二人が登ってくるのを待った。

小柄な乙女だった。太い眉に大きな二重瞼。年は十四、五か。髪の毛をきつく後ろで束ね、頬には花模様の刺青を施していた。麻の貫頭衣の裾からしなやかな脚が伸び、革の甲冑で覆った胸がふくよかに盛り上がっていた。

二人が崖の上に這いあがってきた。

「誰！」

土蜘蛛の乙女は叫び、剣を抜いた。貌は見えないが、その影のかたちから仲間でないことはすぐに知れた。

影が無言で動いた。土蜘蛛の乙女は剣を横薙ぎに払った。剣は空を切り、胸に焼けつくような痛みを覚え、体を前屈みに追った。乳房をしたたかに蹴られていた。全身が痺れ息が詰まった。やっと顔をあげたとき、頬に相手の足の甲が重く叩きつけられた。乙女の体は吹き飛び、樹の幹に叩きつけられ、動かなくなった。

「皇女は、この土蜘蛛の胸乳を蹴ったように、男のふぐり玉を蹴ったのか」

稗田阿礼が頭髮から額に滴り落ちる水を拭いながら言った。アダヒメは不快げに陽気な傍観者を睨みつけた。

雨音を通して足音が迫っていた。仲間の帰還に気づいた土蜘蛛の女たちが迫ってきていた。

雨がやみ、月が雲間から顔を覗かせた。

土蜘蛛の乙女はうつすらと眼を開けた。頭ががんと鳴動し、乳房が引きちぎられそうに痛かった。体を起こそうとしたが、鉄の鎖に縛られたように動かなかった。視界が明瞭になったとき、まず飛び込んできたのは見知らぬ女二人の顔だった。

「十人、すべて殺した」

アダヒメが乾いた声で告げた。

「汝の伴は、これで全てか」

その背後に、血に塗れた土蜘蛛の女たちの屍が転がっていた。

土蜘蛛の乙女は叫び声をあげ、のたうち回った。彼女の両手は後ろ手に縛られ、口は木片をかまされ布で覆われていた。くぐもった絶叫が悲しげに響いた。

「全て、のようだ」

阿礼が言った。

アダヒメは乙女の腕をつかみ、無理やりに立たせた。乙女は脚を撥ね上げ、アダヒメの太股を蹴った。固い筋肉が、乙女の脚を撥ね飛ばした。乙女は再び膝を着き、地に倒れた。

「剛き土蜘蛛の乙女よ」

アダヒメは優しく言った。

「汝等は吾が出会った敵のなかで、もっともよき兵である」

乙女は地に伏せ、号泣した。

洞窟のなかで阿礼は火を起こした。暖かな火が濡れた衣服を乾かし始めた。アダヒメは腕組みをし土壁に背を凭れさせて考えこんでいた。土蜘蛛の乙女は縛られたまま身を横たえ眼を閉じている。

「阿礼」

アダヒメが口を開いた。

「何故、この乙女を生かす」

アダヒメは対岸に潜む土蜘蛛を悉く討ち、船で川を南に下るつもりでいた。阿礼は一人のみ生きて残せと言い張った。とにかく吾に従え、と早口でわめく阿礼に、アダヒメは返す言葉を失った。三人の土蜘蛛の乙女が津の兵を倒して川に飛び込んだのを追って、アダヒメは水に潜った。水中で二人の乙女を短剣で刺した。激しい雨音が乙女たちの絶命の叫びを消した。

阿礼は、木の枝で焚き火を掻き回して空気を送り込みながら答えた。

「問いたかった」

「史人としてか」

「然り」

阿礼は木の枝を火に放り込み、アダヒメを見た。相変わらず迷いのない貌だった。

「皇女よ、高市に近い邑の若い男どもが神隠しに会うことを知らぬか」

「知らぬ」

「誰も気づかぬうちに姿を消し、二月を経て瘦せ細り口もきけぬ態で戻ってくる。人々は、三輪の大物主（オオモノヌシ）、あるいは葛城の一言主（ヒトコトヌシ）などの国津神に拐われ魂を抜かれたと噂しているが、さにあらず。土蜘蛛の女たちは春になると子種を得

るために里の若者をさらう。若者は二月、女たちに精を吸い取られ病み衰える。生まれた子が男ならば殺す。女ならば武を仕込み、優れた兵に育てる」

「……………」

「土蜘蛛がミマキの大王によって悉く討たれたという史は偽りである。まことの史を土蜘蛛は知っている。吾はそう信じる。吾はまことの史を知りたい」

アダヒメの脳裏に再びオオウスの皇子の言葉が蘇った。渴きを覚えた。喉の水気が干上がったように声が哽れた。

「何故に汝は大王家の言い伝えを偽りと信じる。大王家の言い伝えは、稗田の史人が王宮の庭で新嘗の祭りの度に誦する史に依っている」

「吾は……………」

阿礼は闇を見据えて言った。

「七歳のときから密かに稗田の蔵に入り、古い竹簡を読みふけた。九歳のとき、蔵の竹簡と、大王家に献上される史書との食い違いに気づいた。十歳のとき、吾は鮮やかにわかった。稗田の家は、正しい史を伝えているのではない。偽りの史を作り上げている。十一歳のときに気づいた。土蜘蛛や国栖に訊ねれば、まことの史がわかる、と」

「もし、史が偽りならば……………」

アダヒメはまなじりを決して問うた。

「大王家は日輪の女神の末裔ではないのか」

阿礼は首を振った。

「わからない。わからないから吾は土蜘蛛や国栖に会いたい。十歳のときより三年、吾はそう願ひ続けた。その願ひを口にはしなかつたが、稗田宿柝は悟つた。故に吾を皇女とともに国栖へ行かせた。ともに国栖へ辿り着くまでに殺されると望んで、行かせた」

阿礼は寂しげに微笑んだ。

「大王家は皇女を生かしておきたくない。稗田の家は吾を生かしておきたくない」

アダヒメはじつと阿礼を見つめた。阿礼は顔を伏せた。勢い良く燃え盛つた炎が、阿礼の滑らかな白い頬を赤く照らしていた。

「阿礼」

アダヒメは静かに問うた。

「オオウスの皇子は死ぬ間際に言つた。大王家は日輪の女神の末裔ではない。吾らの父祖が、日輪の女神の末裔からヤマトを算奪し、偽りに満ちた神代の史を捏造した、と」

阿礼は眼を伏せた。アダヒメは阿礼ににじりよつた。阿礼はわずかに身を引き、悲しげな瞳をアダヒメに向けた。しばし後に阿礼は口を開いた。

「オオウスの皇子がそう言つたか」

「言つた」

阿礼の唇が引きつつたように横に広がり大きく開かれた。けたたましい哄笑が迸つた。  
「然り。然り」

阿礼は身を振り、涙を流して笑い転げながら言つた。

「大王家は日輪の女神の末裔ではない。オオウスの皇子にそう教えたのは吾である」

アダヒメは阿礼の薄い肩を強くつかんだ。

「何故にオオウスの皇子に」

「皇子は吾を姦した」

阿礼は笑いをおさめた。言葉が火のように口から迸つた。

「小林に吾を引き入れ姦した。皇子は言つた。日輪の女神の末裔に姦されるは恵みである、と。吾は言つた。皇子は日輪の女神の末裔ではない、と。皇子は驚き、悩み、苦しみ、ついに宅に引き籠もり、皇女に討たれた。オオウスの皇子はふぐり玉を潰され、泣き叫びながら死んだ」

阿礼は口を嚙み、息を整えてから静かに付け加えた。

「吾の婢を姦した口持。吾を姦したオオウスの皇子。みな、皇女にふぐり玉を潰され、泣き叫びながら死んだ」

阿礼の眼は涙が溜まり、唇は喜びと感謝を現そうと歪んでいた。

いつの間にか、土蜘蛛の乙女が眼をかすかに開き、二人の話に聞き入っていたのを、アダヒメも阿礼も気づいていなかった。

夜が明けた。



鬱蒼と繁った樹海を通って、後ろ手に縛られた土蜘蛛の乙女と、稗田阿礼が肩を並べて歩いていた。阿礼はさかんに土蜘蛛の乙女に話しかけた。食物、住居、武器、土蜘蛛の習俗に関するあらゆる事を問うた。瞳を輝かせ、無邪気に問い掛ける阿礼に土蜘蛛の乙女も次第に心を開いた。口を塞がれていたため返事は出来なかったが、首を縦に振ったり横に振ったりして答えた。二人の背後をアダヒメが呆れ顔で続いた。

樹海を抜け、崖を攀じ登り、谷川を越え、一昼夜歩いた。

土蜘蛛の邑は、山間の狭隘な窪地にあった。窪地は平らに均され、巨大な石がぼつんと置いてあった。石の頂に太縄を輪にかけてかけてあった。

泉で水を酌む者、獣皮をなめして干す者、幾人かの老いた女たちの姿があった。かつての佻猛な女兵も年をとると日々の生活を支える立場に回る。若い女兵の姿は見えなかった。家屋らしきものは見当たらない。土蜘蛛の女たちは山麓に横穴を穿って起居する。

アダヒメと阿礼が山を降りて窪地に降りたとき、泉で水を酌んでいた老婆が大声で叫んだ。たちまち、横穴からわらわらと武装した乙女たちが現れ、アダヒメたちを取り囲んだ。

「サヤ！」

乙女たちはいっせいに叫んだ。アダヒメはぐいと土蜘蛛の乙女の腕をつかんで引き寄せ、剣を抜いて喉に押し当てた。

「土蜘蛛の長に会いたい。吾はヤマトの大王の皇女アダヒメ」

乙女たちは、ヤマト、と聞くなり頬を紅潮させ、齒ぎしりした。

「ヤマトの皇女か」

鈴を鳴らすような声とともに現れたのは、三十歳半ばか、背が高く、豊満な体を薄衣に包み、髪を長く垂らした女だった。細長い眉に厚く赤い唇。歩く度に薄衣に覆われた大きな乳房が葡萄の房が風に揺れるように、大きく揺れた。

土蜘蛛の乙女たちがいっせいに跪いた。女は鷹揚に頷き、赤く厚い唇をだらしなく緩めた。

「高市の津の対岸に兵を伏せておいたが、ここ三日、伝令が途絶えた」

女は微笑みを消し、まっすぐにアダヒメを見据えた。土蜘蛛の乙女たちが顔をあげた。

アダヒメは口を開こうとして、阿礼が遮った。

「吾はヤマトの大王家に使える史人の稗田阿礼。汝は土蜘蛛の女王か」

「女王」

女は笑い出した。

「たしかに吾は土蜘蛛を束ねるマユワ（眉輪）。汝らが捕らえた乙女は吾が娘のサヤ（小弥）。吾の母はサヤ。そのまた母はマユワ。土蜘蛛を束ねる女は代々、アユメとサヤを交互に名乗る。たしかに吾は土蜘蛛の長であり、その乙女はいずれ長となる吾が娘。しかし、吾等はクニを持たぬ。クニを持たぬ王がどこにおろうか」

阿礼は、ずいと進み出て、マユワと名乗る土蜘蛛の長の前に跪いた。

「皇女と吾は国栖へ行く」

「国栖」

マユワは訝しげに首を傾げた。

「ヤマトの女が兵も連れずに二人で国栖へ行くのか」

「然り」

阿礼は声を張り上げた。マユワは頬を緩めた。

「殺されたいか」

「殺されたくはない。しかし、ヤマトの大王家は、自らの手を汚すことなく、まつるわぬ

民が皇女と吾が殺すことを望む」

「面白げなヤマトの乙女かな」

マユワは肉づきのよい体をゆすつて再び哄笑した。

「まずは吾が娘の縛めを解け。共に来よ」

東に向かつて穿たれた大穴が、マユワの住まいであった。

「夜明け、日輪は真先にこの穴に光を差し入れる。吾は邑の誰よりも早く日輪の光を浴びる」

その隣に穿たれた少し小さめの穴に、アダヒメと阿礼は招じ入れられた。

マユワは、果物を醸かして造った酒を碗に入れて勧めながら、機嫌良さそうに喋った。白い腕に赤く縄の跡を着けた娘のサヤが、山菜や木の実を持った高杯たかきをアダヒメと阿礼の前

に並べた。

「呑め。毒は入っていない」

阿礼が一瞬、眼を光らせた。その光をマユワはすぐに察した。

「土蜘蛛は武を尊ぶ。堂々と剣を交えて事を決する。敵を倒すに、ヤマトの大王家のようはかりごとに謀はかりごとは用いぬ」

阿礼は碗を取り上げ、一気に飲み干した。碗を置くと、深く息を吐いた。頬がみるみる赤く染まった。

阿礼は折り畳んだ膝を前に進めた。

「土蜘蛛の女王よ」

「女王ではない」

「汝は、日輪の女神の末裔なのか」

マユワは笑った。

「汝らヤマトの大王家こそが日輪の女神の末裔と称している」

「吾は信じぬ」

マユワは細長い眉をつり上げ、眼を丸くした。

「ヤマトの皇女よ。汝も信じぬのか」

アダヒメは眼を伏せた。

「大王家の皇女が信じぬというのか。面白い」

マユワは碗の酒を飲み干した。白い肌が茹でたように桜色に染まり、妖気が漂った。  
「しかし、ヤマトの史人よ。吾もまた汝の言うことを信じない」

マユワは袖で唇を拭った。

「ヤマトの大王家に連なる者を信じるわけにはいかぬ。汝等は十人の土蜘蛛の乙女たちを殺戮した。だが、汝等が吾等の仲間となれば心強い。しかし、信じない」

「吾等を如何する」

アダヒメが初めて口を開いた。マユワは笑った。

「汝らを捕らえようとすれば、土蜘蛛の乙女がおびただ夥しく殺される。吾は愚かではない。しかし敵か味方かすらも判じがたい汝等をどう遇するか、よい考えが浮かばない」

「ならば」

「古いにしえよりの作法がある。まれびとは歓待せねばならぬ。故に酒を振る舞う」

サヤがマユワの傍らに並び、にこにこして碗の酒に口をつけた。豊満な母親は、一口で碗の酒を飲み干し、それから両手を叩いた。

「よい考えが浮かんだ」

薄衣で覆った胸元が乱れ、紅に染まった大きな乳房が覗いた。

「ヤマトの大王家の一族の者を一人、ここに連れて来よ」

「大王家の一族の者」

「生かして連れて来ようが」

マユワの唇が一瞬、凄惨に歪んだ。

「死なして連れて来ようが、いずれでもよい」

真っ直ぐ歩けぬまでにしたたかに酔ったマユワをサヤがだき抱えて去った後、アダヒメは腕組みをし、俯いて黙り込んでいた。

「皇女よ」

阿礼がアダヒメの傍らにすりより、肩を揺すった。

「何を迷う」

アダヒメは答えなかった。阿礼は言い募った。

「吾が、稗田の一族の者を連れて来よ、と言われれば迷わずに行く」

アダヒメは物憂げにそっぽを向いた。阿礼は、アダヒメの耳をつかんでこちらに顔を向かせるばかりの勢いで迫った。

「大王は皇女を殺そうとした。イリビコの皇子も謀を用いて皇女を殺そうとした。大王家は皇女の敵。稗田の一族が吾の敵であるように」

アダヒメは俯き、口を結んで開こうとしなかった。

「皇女は恐ろしいか」

アダヒメの眼がかすかに動いた。

「オオウスの皇子のように、日輪の女神の末裔ではない、と知るのが恐ろしいか」

「吾は……」

アダヒメは口を開いた。声音が笹のように震えていた。

「吾が父を知らない」

阿礼はアダヒメを見つめた。アダヒメの母は謀叛を起こした兄に殉じたサオヒメの異母妹タカノヒメであった。だが父が大王なのか、あるいはサオヒメの兄サオヒコなのか、死んだタカノヒメの他は誰も知らぬことは阿礼も知っていた。

アダヒメの唇が固く結ばれ、内に秘めた感情が迸り出るのを必死に耐えていることは、阿礼にも察せられた。

「皇女よ」

阿礼は静かに言った。

「吾の父と母は、吾が幼い頃に死んだ。父も母もいないが故に、稗田の家では吾を守ってくれる人はいなかった」

阿礼は足元の木の枝を折って、火勢の衰えた焚き火を掻き回した。

「故に吾は、稗田の記する史を信じぬ」

「吾は……」

アダヒメは膝頭に顔を埋めた。

「何者か……」

阿礼は、アダヒメがあれほど大王に疎まれ、露骨に死地へと追いやられながらも、一度

もその命に背いたことがないことに気づいた。

阿礼は言葉を失った。

ふと、穴の入口に人影が立った。サヤだった。

「ヤマトの皇女よ。国栖へ行けば……」

サヤは微笑んだ。

「汝のまことのおやが分かるかもしれぬ」

アダヒメは顔をあげ、眼を見開いた。サヤはアダヒメを一瞥し、踵を返して去っていった。

翌朝。

陽光が靄を透してまっすぐに差し込んできた。阿礼が眼を覚ますと、アダヒメは甲冑を着込んでいた。起き上がった阿礼に気づくと、傍らの剣を差し出した。

「預ける」

阿礼はぼかんとして、ずしりと重い剣を両手で抱えた。

アダヒメは立ち上がり、穴を出た。

涼やかな風が吹いていた。山麓の大穴の前で炊煙が白く立ちのぼっていた。焚き火にかけた土器をかき回していた女たちが、いつせいにアダヒメを見た。

アダヒメは大股で邑を出た。

「皇女は剣も持たずに出たか」  
床に敷いた獣皮に寝そべったマユワはおかしそうに笑った。

「このまま去ぬか、帰ってくるか……」

「仮にも大王の一族」

サヤは、泉で酌んだ水を溜めた壺に、橡の実の皮を石包丁で剥いては晒しながら言った。  
「血を流したくないのであろう」

「では、大王家の者を、生きながらにして連れて来る気かえ」

マユワは、盛り上がった乳房に浮かぶ寝汗を拭った。

「時が来た、のであろうな」

二日後の夜。

高市の津では相変わらず篝火が勢い良く焚かれ、兵たちがたむろしていた。

「夜討ちが絶えたな」

川べりの石の上に腰かけていた大柄な髭面の兵が口を開いた。傍らにいた小柄で太った兵が頷いた。

「対岸の森にも敵の気配がない」

「物見を出さぬのか」

髭面の兵は欠伸をしながら言った。

「敵は去ったのではないか。それを確かめられれば寝ずの番をせずにする」

「物見は出してないようだ」

太った兵は声を潜めた。

「噂だが、兵長は皇子に物見を出すよう勧めた。皇子は伏せたまま何も答えぬ。皇子の命がなければ兵は動かさない」

「伏せたまま。かの皇女にふぐり玉を潰されてか」

二人は卑猥にくぐもった笑いを漏らした。

そのとき、彼らの背後で水音がした。

振り返ると、背後に月の光を受けて、黒々とした影がこちらに向かって歩いてきた。

「わ……」

兵たちは怯えて後ずさった。髭面が叫んだ。

「敵ぞ！」

数十の兵が集まり、影を取り囲んだ。久米や大伴、佐伯の兵長も現れた。

影はくるぶしを川面につけたまま、濡れた髪を掻き上げながら言った。

「イリビコの皇子に会いたい」

「皇女……」

佐伯の兵長が呻いた。アダヒメは川からあがった。篝火火がその貌を照らし出した。

兵長たちは、大王家の皇女に対する拝礼を忘れていた。

アダヒメはじつと佐伯、久米、大伴の兵長を順繰りに見つめた。兵長たちは狼狽し黙したままであった。アダヒメが生きて帰ってきたことは、彼らが大王家から託された任にとつて都合が悪すぎるのか。アダヒメが敵か味方か判断を下せるイリビコの皇子は、寢屋でうなされている。

アダヒメは歩き出した。兵たちは彼女の歩調に合わせて、矛を構えたままじりじりと下がった。彼女はまっすぐに歩いた。アダヒメが歩くに連れて、彼女を囲む数十の兵たちが輪を崩すことなく移動した。

ざわめきにイリビコの皇子は眼を覚ました。

寢屋の入口に、人影があつた。その背後にいくつもの松明があかあかと燃えていた。松明のあかりが、甲冑や矛に照り映えている。

「誰か」

イリビコは腫れた臉をかすかに開け、嘎れた声を絞り出した。ひとつの人影がぬつと入ってきた。イリビコは眼を見開いた。半身を起こし、尻をついたまま後ずさるうとして、激痛に顔を歪めた。両手が投げ出された脚のつけ根に置かれた。

「痛むか」

アダヒメはイリビコの前に片膝をついた。

「生きて帰ってきたか」

イリビコは顔をあげた。汗が滝のように額から流れ落ち、作り笑いの虚ろさを際立たせた。

「対岸の森の敵兵の気配がない。妹なる皇女よ、汝が敵を平らげたのか」

アダヒメはそれには答えずに声を低めた。

「イリビコの皇子よ。土蜘蛛がいた」

イリビコの皇子は微笑みを消して鸚鵡返しに呟いた。

「土蜘蛛」

「吾は汝を土蜘蛛のもとへ連れてゆく」

イリビコの皇子は青ざめ、激しく全身の肉を震わせた。

「土蜘蛛は、すでに滅んだ」

「大王家と稗田の一族がこしらえた偽りの史にはそう記してある。まことは、土蜘蛛は邑をなして、すぐそこにいる。対岸の森に潜み、船に矢を射かけ、夜な夜な兵を殺戮したのは十人の土蜘蛛の女軍。彼らは、まことの史を知っている」

「まことの史……」

「大王家は、日輪の女神の末裔ではない」

「逆賊！」

イリビコの皇子は叫んだ。

「佐伯、久米、大伴の兵どもよ。皇女は逆賊ぞ。討て」

アダヒメは立ち上がった。イリビコの皇子の顎を蹴りあげた。イリビコの皇子は無様に仰向けに倒れた。アダヒメは、その股間を踵で踏んだ。鞆丸は橘の実のように腫れ上がった。イリビコは蛙が踏みつぶされたような悲鳴をあげた。矛を構えて殺到しようとする兵たちを、佐伯、久米、大伴の兵長たちが「待て」とどめた。

「去ね！」

アダヒメは怒鳴った。

「去なずば、皇子のふぐり玉は踏み砕かれる。血が溢れ、死ぬ。去ね！」

イリビコは弱々しくアダヒメの脛をつかみ、唇を震わせて痙攣した。兵長たちは顔を見合せ、唇を噛み、兵たちに合図をした。寝屋の入口を囲んでいた兵たちは姿を消した。

「アダ……ヒメ……」

イリビコは悶えながら声を絞り出した。眼が助命を懇願していた。

アダヒメは冷やかに言い放った。

「吾はこれより、大王家の敵である」

踵に体重を乗せた。ふぐり玉が踏み砕かれた。陰囊が裂け、血と体液が噴き出した。

遠巻きに寝屋を囲んでいた兵たちは、肩にイリビコの皇子を担いだアダヒメが姿を現したのを見た。イリビコの皇子は生きているのか死んでいるのか、動く気配もなかった。

アダヒメは兵たちを見回し、川に向かって歩き出した。久米の兵長が囁いた。

「皇女は剣を帯びていない」

佐伯の兵長が応じた。

「イリビコの皇子は、皇女を逆賊と言った」

大伴の兵長が叫んだ。

「兵どもよ、皇女を討て！」

兵たちがアダヒメに殺到した。アダヒメは肩に担いだイリビコの皇子を兵たちに投げつけた。皇子の体は三方から矛に貫かれた。兵たちが動揺する間にアダヒメの大柄な体が跳躍した。

間近な兵の股間が蹴り上げられた。兵は呻いた。アダヒメは兵が取り落とした矛を拾った。たちまち、七つの屍が川原に転がり、残る兵たちは金縛りにあったように動かなくなった。アダヒメはイリビコの皇子の体から矛を引き抜き、呆然と立ち竦む兵長たちを見つめて言った。

「皇子を殺したのは汝らの兵である」

大伴の兵長が剣を抜き、わめきながら突進した。アダヒメは素早く身をかわした。大伴の兵長は体勢を崩しつんのめった。アダヒメはその股間を後ろから蹴った。大伴の兵長は呻いた。アダヒメは振り上げた足を瞬時に後ろへはね上げた。背後から走り寄った久米の兵長の脚と脚との間にアダヒメの踵が打ち込まれ、久米の兵長の体は宙に浮き、どざりと

落ちた。アダヒメは久米の兵長の顔面を蹴った。鼻梁が砕け、眼球が飛び出した。佐伯の兵長は背骨を踏み砕かれた。

アダヒメは、地に尻を着けたまま震えるばかりの同伴の兵長に歩み寄った。兵長の口から悲鳴が洩れたが、脚は恐怖で硬直していた。アダヒメは右手で彼の喉輪をつかみ、持ち上げた。同伴の兵長の体が宙に浮いた。脚は虚しくばたばたと虚空を蹴った。

アダヒメは同伴の兵長を持ち上げたまま、左手で彼の股間をつかんだ。同伴の兵長の体のけぞり再び硬直した。アダヒメが左手をひねると、彼は血反吐をはき、動かなくなつた。

命令を出す主を失った兵たちは、呆然と立ち尽くすのみだった。アダヒメが再び皇子を担ぎ上げ歩き始めたとき、兵たちは矛を投げ出し、川原の石に額をこすりつけた。

アダヒメは悠然と川に入り、対岸へと消えた。

「死なして連れて来たか」

眼前に投げ出されたイリビコの皇子の屍を、マユワは一瞥した。アダヒメの眼に、迷いが消えているのを稗田阿礼は気づいた。

「汝を信じる」

マユワは微笑んだ。

阿礼は初めてアダヒメを美しいと思った。